# 日本の寓話，童話，民話，伝説，説話等の系譜的綜合的研究

——諸外国のそれら（すなわち Fabel, Märchen, Volkssage u.s.w.）との比較において——

Treatise on the fable and the others
from the comparative point of view

〔第 二 報〕

馬場　喜敬・中地万里子・川合　貞子・加藤　優子

## 児童書に採用された伝承文芸
## ——イソップ寓話を中心に——
〔第Ⅱ報—その１—〕

中地万里子，川合貞子，加藤優子

### はじめに

昔話，民話，伝説など，民衆の間で＜いつ，誰が＞ともなく，自然発生的に生まれ，語り継がれてきた伝承の文芸は，先祖からの遺産として継承されるが，それは，伝承の過程でしばしば生活文化の一環としての修正が行われ、部分的な変容が繰り返されていく。時代や民族のさまざまな文化の歴史の波をくぐってきた今日の伝承文芸の特質を検討し，そのルーツを辿ることは，われわれの生活文化（価値観や具体的な生活様式）の歩みを知るうえで重要な意義をもっている。

本研究はそのような立場から，手がかりとして，ヘロドトスの「史誌」によって，B.C.600年頃に実在したというイソップを語り部の始祖として，後世，広く世界に流布したとされる「イソップ寓話」の日本における移植の歴史，即ちその翻訳，翻案，再話の変遷について検討することを通して，日本人の生活意識，教育観の特質に迫ろうとするものである。これは，「日本の寓話，童話，民話，伝説，説話等の系譜的綜合的研究……諸外国のそれら（すなわち Fabel, märchen, Volkssage u.s.w）との比較において……」と掲げたプロジェクトの全体構想の一分節として，児童学専攻のわれわれ三人が，とくに関心をもつ児童書の領域から主題にアプローチしていこうという意図をもつものである。

すでに，民話や伝説が子どもに与えられる形において、再話者（作家）や社会の児童観教育観によって再創造的に変容された事実についての先行研究は，滑川道夫氏の『桃太郎像の変容』＜東京書籍＞，鳥越信氏の『桃太郎の運命』（ＮＨＫブックス）など知名のものから，＜かちかち山＞＜赤ずきん＞など内外の昔話，童話がその残酷性等において書き替えられていることの問題性を指摘したものまで，研究の視点も材料も種々みられるが，本研究では，子どもの本にとりあげられた「イソップ寓話」を＜生活文化＞という多角的な観点から検討していきたい。なお，本稿では，中世末期に伝えられたと考えられている「イソップ寓話」の中から資料として考証できるものに限定し、戦中の1945年

までに出版されたものを対象として，1．子どもの本における「イソップ寓話」の登場の経緯，2．子どもの本に採用された「イソップ寓話」の種類，3．「イソップ寓話」の再話の比較，4．再話者（著者，編集者）の「イソップ寓話」観と教育観児童文化観について述べておきたい。本研究の核心となる「イソップ寓話」の再話分析による生活意識，価値観の考察と，その変遷については，1945年度以降の児童書にみられる「イソップ寓話」も含めて，次年度以降に行なう予定である。

## 1　子どもの本におけるイソップ物語りの登場

日本における「イソップ寓話」の最初の翻訳紹介は，未だ明らかにされていないが,安土桃山時代の文禄2年（1593）に天草のキリシタン学寮から出版された，日本語訳，口語文，ローマ字表記の『ESOPONO　FABVLAS』（通称天草本）が，現存する文献の最古のものといわれている。その後，文語文の国字本として慶長末期から元和寛永・万治の頃（1596～1661）に仮名草子『伊曽保物語』として数種の版が重ねられ，世にもてはやされたという。「日本古典文學大系90『假名草子集』」（岩波書店)，「瀬田貞二著『落穂ひろい』」（福音館書店）によれば、天草本の内容は，イソップの伝記と70篇の寓話（別表１）から成り，仮名草子の『伊曽保物語』は伝記と64篇の寓話（別表２）で編まれている。また，仮名草子本を天草本と比較すると，共通話25篇で、その順序は等しく，イソップの伝記は，ほぼ同じ材料から出ているという。しかし，ロドリゲスの『日本大文典』（土井忠生訳）に出ているイソップの例文が，天草本，仮名草子本の両者にわたり，かつ両者にない部分もあるので，その祖体になった「イソップ寓話集」があったのではないかと推察されている。その祖体については先にもふれたように不明である。

われわれプロジェクトのメンバー４人は，先年ＮＨＫのテレビ放送から，山形県村山市楯岡の村川氏が江戸時代の『伊曽保物語』を所蔵されていることを知った。その実物を見ること，またその本を所蔵された背景について知るため，61年５月フィールド・ワークとしての山形への調査旅行を行った。村川家は，『村山市史編纂資料第二集』によれば，17世紀の末ごろに伊勢松坂在から楯岡に移住された，伊勢商人の流れを汲んだ楯岡町有数の名家である。幕末には館林藩秋元氏（弘化２年山形から移封）の飛地，羽州領楯岡の御用達衆三人の一人で，当主伊勢屋村川多兵衛氏は，嘉永３年，秋元家の「御勝手御用」を命ぜられ，苗字御免の上，御用達を命ぜられた由緒有る家柄である。近世において，出版技術が発達し，商品経済の流通機構が全国の城下町や門前町を中心に組織された中で，当時の小説本ともいえる草子類の出版物が，商品として流通した。しかし，大量生産が困難な出版事情と，民衆のつましい生活水準では教養や娯楽のための書物の値段は，一般庶民の誰でもが手の届くものではなかったようである。そこで，このような仮名草子本も，今では全国に数える程の資料しか残っていないのであろう。村川氏が，手広く家業の木綿小売を営み，一方農業経営も行っていた家であったこと，そして，代々教養豊かな家であったことが，貴重な江戸時代初期の仮名草子『伊曽保物語』を今日まで保存された所以であろう。

国字本仮名草子『伊曽保物語』は，「日本古典文學大系90『假名草子集』」の森田武氏の解説によれば，――その種類は少なくとも10種あり，写本も稀でないことから，近世初期にかなり読まれたらしい――という。また――キリシタン禁制のきびしい時期にもかかわらず，一読して異国伝来の書と知られるこの書が出版されたのは，一に教義に無関係な教訓書であったからに外ならず，それが，啓蒙的な仮名草子，いわゆる教訓物盛行の時潮に乗ったためであるが，また一面，南蛮紅毛の異国趣味が一つの支えに

表1　天草本「伊曽保物語」

| 番号 | |
|---|---|
| | イソホの生涯のこと |
| | エジプトより不審の條々 |
| | イソホ養子に教訓の條々 |
| | ネタナヲ帝王イソホにご不審の條々 |
| 1 | 狐と羊の例えの事 |
| 2 | 犬と羊の事 |
| 3 | 犬が肉を含んだ事 |
| 4 | 獅子と犬と狼と豹との事 |
| 5 | 鶴と狼の事 |
| 6 | 鼠の事 |
| 7 | 鷲とカタツブリの事 |
| 8 | 烏と狐の事 |
| 9 | エノコ（犬）と馬の事 |
| 10 | 獅子と鼠の事 |
| 11 | 燕と諸鳥の事 |
| 12 | イソホ,アテナの人々に述べる例え |
| 13 | 鳶と鳩の事 |
| 14 | 狼と豚の事 |
| 15 | 孔雀と烏の事 |
| 16 | 蝿と蟻の事 |
| 17 | 獅子と馬の事 |
| 18 | 馬と驢馬の事 |
| 19 | 鳥とケダモノの事 |
| 20 | 鹿の事 |
| 21 | 腹と四肢六根の事 |
| 22 | パストロ（牧羊者）と狼の事 |
| 23 | 蟬と蟻の事 |
| 24 | 狼と狐の事 |
| 25 | 鳩と蟻の事 |
| 26 | 鶏と下女の事 |
| 27 | 二人の知人の事 |
| 28 | 棕櫚と竹の事 |
| 29 | 大海と野人の事 |
| 30 | 炭たきと洗濯人の事 |
| 31 | 病者と薬師の事 |
| 32 | 陣頭の貝吹きの事 |
| 33 | 母と子の事 |
| 34 | 鶏と犬の事 |
| 35 | 獅子王と熊との事 |
| 36 | 貧欲な者の事 |
| 37 | 驢馬と狐の事 |
| 38 | 馬と驢馬の事 |
| 39 | 二人同道して行く事 |
| 40 | 野牛と狼の事 |
| 41 | 驢馬と獅子の事 |
| 42 | 蜜つくりの事 |
| 43 | 烏と鳩の事 |
| 44 | 蝿と獅子王の事 |
| 45 | 盗人と犬の事 |
| 46 | 老いた犬の事 |
| 47 | 蝮蛇と小刀の事 |
| 48 | 山と杣人（ソマビト）の事 |
| 49 | 狐とイタチの事 |
| 50 | 亀と鷲の事 |
| 51 | 漁人の事 |
| 52 | 野牛の子と狼の事 |
| 53 | 童の羊を買った事 |
| 54 | 鷲と烏の事 |
| 55 | 狐と野牛の事 |
| 56 | 百姓と子どもの事 |
| 57 | 尾長鳥と孔雀の事 |
| 58 | 鹿と子の事 |
| 59 | 片目な鹿の事 |
| 60 | 鹿と葡萄の事 |
| 61 | 蟹と蛇の事 |
| 62 | 女人と大酒を呑む夫の事 |
| 63 | パストロ（牧羊者）の事 |
| 64 | 驢馬と狐の事 |
| 65 | 狼と子を持った女の事 |
| 66 | 蛙と鼠の事 |
| 67 | ある年寄った獅子王の事 |
| 68 | 狐と狼の事 |
| 69 | 老人の事 |
| 70 | 獅子と狐の事 |

注．ローマ字表記を書きかえたもの。

表2　仮名草子「伊曽保物語」

| 番号 | | |
|---|---|---|
| 伊曽保物語〈上〉 | 第 1 | 本國の事 |
| | 2 | 荷物を持つ事 |
| | 3 | 柿を吐却する事 |
| | 4 | 農人の不審の事 |
| | 5 | けだものの舌の事 |
| | 6 | 風呂の事 |
| | 7 | しやんと潮飲まんと契約候事 |
| | 8 | 棺槨の文字の事 |
| | 9 | さんの法事の事 |
| | 10 | りいひやより勅使の事 |
| | 11 | 伊曽保りいひやに行く事 |
| | 12 | いそ保りいひやに居所を作る事 |
| | 13 | 商人かねをおとす公事の事 |
| | 14 | 中間とさぶらひと馬をあらそふ事 |
| | 15 | 長者と他國の商人の事 |
| | 16 | いそほと二人のさぶらひ夢物語の事 |
| | 17 | いそほ諸国をめぐる事 |
| | 18 | いそほ養子をさだむる事 |
| | 19 | ねたなを帝王不審の事 |
| | 20 | ゑりみほいそほが事を奏聞の事 |
| 伊曽保物語〈中〉 | 第 1 | いそほ子息に異見の事 |
| | 2 | ゑしつとの帝王より不審の返答の事 |
| | 3 | ねたなをいそほに尋給ふ不審の事 |
| | 4 | いそほ帝王に答る物語の事 |
| | 5 | 學匠不審の事 |
| | 6 | さぶらひ鶏鷹にすく事 |
| | 7 | いそほ人に請ぜらるゝ事 |
| | 8 | 伊曽保夫婦の中なをしの事 |
| | 9 | いそほ臨終におゐて鼠蛙のたとへをいひて終る事 |
| | 10 | いそ保物のたとへを引きける條々 |
| | 11 | 狼と羊の事 |
| | 12 | 犬と羊の事 |
| | 13 | 犬と肉の事 |
| | 14 | 獅子王・羊・牛・野牛の事 |
| | 15 | 日輪と盗（人）の事 |
| | 16 | 鶴と狼の事 |
| | 17 | 獅子王と驢馬の事 |
| | 18 | 京・田舎の鼠の事 |
| | 19 | 狐と鷲の事 |
| | 20 | 鷲とかたつぶりの事 |
| | 21 | 烏と狐の事 |
| | 22 | 馬と犬の事 |
| | 23 | 獅子王と鼠の事 |
| | 24 | 燕と諸鳥の事 |
| | 25 | かはづが主君を望む事 |
| | 26 | 鳶と鳩の事 |
| | 27 | 烏と孔雀の事 |
| | 28 | 蝿と蟻の事 |
| | 29 | 鼬の事 |
| | 30 | 馬と獅子王の事 |
| | 31 | 獅子王とはすとるの事 |
| | 32 | 馬と驢馬の事 |
| | 33 | 鳥けだものと戦ひの事 |
| | 34 | かのしゝの事 |
| | 35 | 庭鳥と狐の事 |
| | 36 | 腹と五體の事 |
| | 37 | 人と驢馬の事 |
| | 38 | 狼とはすとる（の）事 |
| | 39 | 猿と人の事 |
| | 40 | 獅子王と驢馬の事 |
| 伊曽保物語〈下〉 | 第 1 | 蟻と蟬の事 |
| | 2 | 狼といのしゝの事 |
| | 3 | 狐と庭鳥の事 |
| | 4 | 龍と人の事 |
| | 5 | 馬と狼の事 |
| | 6 | 狼と狐の事 |
| | 7 | 狼夢物語の事 |
| | 8 | 鳩と蟻の事 |
| | 9 | 狼と犬の事 |
| | 10 | 狐と狼の事 |
| | 11 | 野牛と狼の事 |
| | 12 | 鷲と烏の事 |
| | 13 | 獅子王と驢馬の事 |
| | 14 | 野牛と狐の事 |

| | | |
|---|---|---|
| 伊曽保物語〈下〉 | 15 | ある人佛を祈る事 |
| | 16 | 鼠と猫の事 |
| | 17 | 鼠の談合の事 |
| | 18 | 男二女を持つ事 |
| | 19 | 蟷螂の事 |
| | 20 | 孔雀と鶴の事 |
| | 21 | 人を嫉むは身を嫉むといふ事 |
| | 22 | 蛙と牛の事 |
| | 23 | 童子と盗人の事 |
| | 24 | 修行者の事 |
| | 25 | 庭鳥こがねの卵を産む事 |
| | 26 | 猿と犬の事 |
| | 27 | 土器慢気をおこす事 |
| | 28 | 鳩と狐の事 |
| | 29 | 出家とゑのこの事 |
| | 30 | 人の心のさだまらぬ事 |
| | 31 | 烏人に教化をなす事 |
| | 32 | 鶴と狐の事 |
| | 33 | 三人よき中の事 |
| | 34 | 出家と盗人の事 |

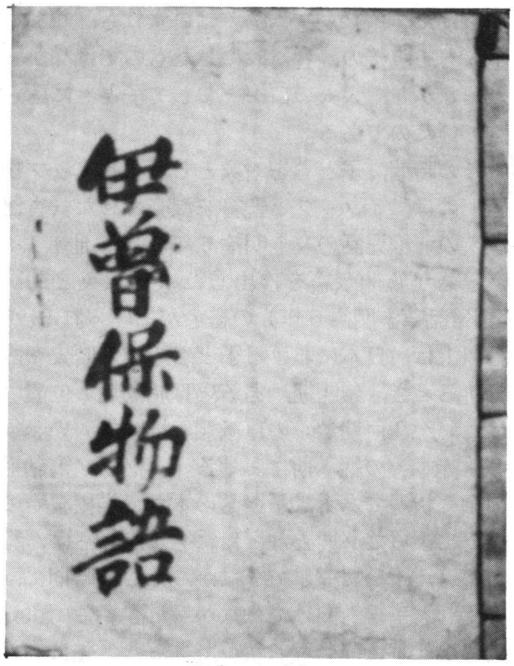



写真1　表紙

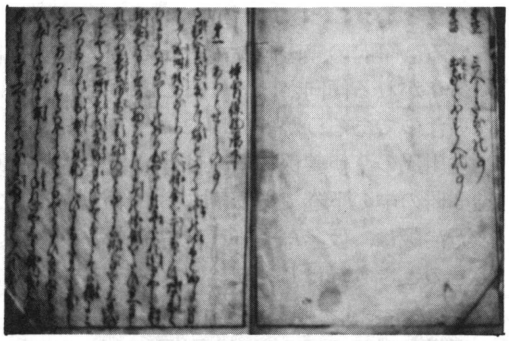


写真2　第1．ありとせみの事

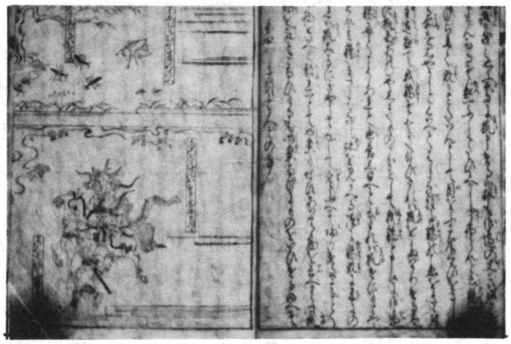


写真3　第4．たつと人との事(下段絵)

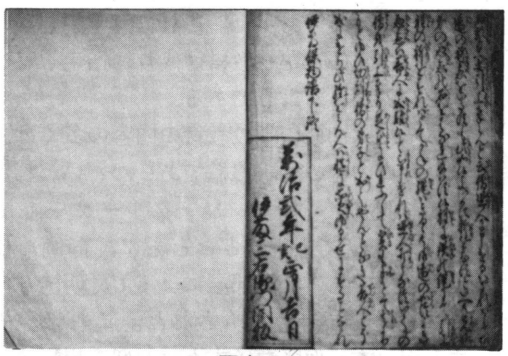


写真4

なったということもあるのであろう。――といっている。幕府の鎖国政策のもとで，異国の文化にあこがれる傾向が，すでにこの時代に芽生えていたのであろうか。

村川氏の『伊曽保物語』は万治2年の版で3巻3冊の中の下巻である。なお、年代的にはこの万治版は，仮名草子本『伊曽保物語』の末期のものとされ，はじめて絵入り本となっている。（写真1から4参照）

近世におけるイソップの影響は，他の書物にも数多く見られるという。今回はそれらの書物にあたることができなかったが、前掲文献によれば，同時代の『戯言養気集』（1615年）に「烏と狐」がとりあげられたのをはじめ『悔草』（1643年）に2話，『わらんべ草』（1651年）に4話，『為愚痴物語』（1662年）に「猫の首に鈴」『絵入り教訓近道』（1844年）にも「猫の首に鈴」ほか15話が引かれている。イソップ話の寓意が、処世訓として活用され，人気を得ていたようである。

明治期に入ると，文明開花の政策の中で，西欧の文物をとり入れ吸収する動きは著しく，先進諸国に追いつくための教育施策も急がれて，明治5年に学制が公布され，教育の義務化が進められた。従来の階層別封建社会がくずされ，学芸で身を立てる青雲の志を抱く若者が続出した。この明治初年にベストセラーになった書物は，福沢諭吉の『学問ノススメ』『世界国尽』など啓蒙書の類であった。これは，学制をしいたばかりの文部省が，教科書代りに指定したことにも関係があるようである。

ところで，初期の学校教育の内容の多くは，欧米の教育内容の翻訳移植であったといわれるが，この時期，「ロビンソンクルーソー」や「アラビアンナイト」などとともに，静岡藩校の英語教授であった渡部温によって，明治6年『通俗伊蘇普物語』が紹介された。これは，先行する天草本，仮名草子本とは原典を異にするジェイムズ（Thomas. James, 1595～1624）の英訳本からの重訳であり，動物戯画に長じ，当時一流であった河鍋暁斎の挿画を添えて出版された。書名に「通俗」の二字を頭冠してあるように，わかりやすい話を237篇抄出し，その例言にも次のように述べているように，専ら家庭向きに書かれたようである。

例言には――此伊蘇普氏の寓言譬喩は，徳教を婦幼(おんなわらべ)に説示す径捷(ちかみち)にて　いかなる村童野婦といえども　其の事理(わけあい)を解し易き事恰も我邦の落話(おとしばなし)に異らず……　意味の深長なるとに注意して，猶又一層の分解を加へ童蒙(こどもしゅう)へ説諭せらるる事あらば　予が本懐これに過ず――と記している。

和綴じ6冊から成っていたこの本から，のち「兎と亀」の一篇が冨山房の国語読本巻一に簡単な「絵ばなし」として採用され，さらに文部省編の国定教科書にそれはうけつがれている。有名な「モシモシ　カメヨ」の歌は，冨山房でこの教科書に関係した石原和三郎が作詞し，納所弁次郎が作曲したものである。

その他，明治初年のイソップ紹介には，（阿部弘国，青山清吉刊の『漢訳伊蘇普譚』明治9年　和本1冊）などの書名がみられるが，以上にあげた「イソップ物語」はいずれも，幼ない子どもを直接の読者対象にしたものではなかった。しかし，大人の口をとおして子どもに語られていたのである。

この時期，子どもを対象とした「イソップ物語」には，イソップと聖書を混交させた（省己遊人の『稚児話の友』明治6年和本1冊），イソップから90余篇を抄出した（福沢英之助訳『訓蒙話草』明治6年）の書名があげられる。

以上は，日本における子どもの本の歴史を区分するとき，黎明期，あるいは胎動期と位置づけたい，江戸期からの草紙類・折絵本，いわゆる「赤本」の継承期における「イソップ寓話」の紹介状況である。子どもの本が，学校教育の発足によって必要となったにもかかわらず，教科書さえ十分に充足できなかったこの時期に，必ずしも子ども向けではなかった啓蒙書の類は，教科書代りに使われる状況であった。先にあげた渡部温の『通俗伊蘇普物語』も修身書として

多く用いられている。

明治20年代に入ると，日本の子どもの本は漸く，独自の居場所を獲得し，子ども読者を対象とした出版が行われるようになった。「イソップ寓話」に関しても，教科書の小学読本や，児童雑誌にとりあげられるほか，単行本の児童書が出版されはじめる。その内容分析に関しては，今後の研究課題であるが，その書名の一部を掲げておく。

①『伊蘇普物語』（イソップ）田中達三郎訳　明治21年
②『新訳伊蘇普物語』青湲散史著　積善館　明治25年
③『イソップのはなし』―少年世界文庫５―　西村酔夢著　明治35年
④『新伊蘇普物語』―明治お伽噺７―　大江小波著　明治36年
⑤『亀の知恵』―世界お伽噺73―　大江小波著　明治38年
⑥『新伊蘇普物語』　上田万年解説　明治40年
⑦『正訳伊蘇普物語』　佐藤潔訳　明治40年
⑧『イソップ物語』　雨谷一菜庵著　明治40年
⑨『ポケット新訳伊蘇普物語』　馬場直美編　明治43年
⑩『イソップお伽噺』　巌谷季雄著　明治44年

大正期に入ると，一流童画家を起用した豪華本『イソップ物語』も出て，児童文化財としての面目を新たにモダンな洋風児童書が出現する。同時に『グリム童話』『アンデルセン童話』などと肩を並べ，シリーズ本の１冊としても種々登場している。また，幼児や低学年向けにカタカナ表記やストーリーの簡略化も行われている。それらについては，ここでは述べる余地がない。

## 2　子どもの本に採用された「イソップ寓話」の話材

明治以後，翻訳，翻案，再話，再創造の形で（これらのことばの意味する内容についての定義は難しいが，一応の常識でとらえておくことにしたい）児童書に紹介された「イソップ寓話」の話材について，今回大阪府立国際児童文学館所蔵の資料（表３）について，調査照合した結果から，その主なものをあげると（表４）の通りである。

話材の基準として，シャンブリー版を底本と

表３　資料　『イソップ寓話集』　（大阪国際児童文学館蔵）

| 記号 | 発行年 | 書名 | 訳・著・編等　出版社<>は版 | 話数 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| a | 1892(M25) | 新譯　伊蘇普物語 | 青渓散史著　積善館〈5〉 | 281 | 上152譚 下129譚 |
| b | 1907(M40) | 新訳　伊蘇普物語 | 上田万年解説　鐘美堂〈3〉 | 160 | 附 ぱんちやたんとら其九まで |
| c | 1907(M40) | 正譯　伊蘇普物語 | 佐藤潔訳　小川尚文堂〈4〉 | 126 | |
| d | 1910(M43) | ポケット　新訳イソップ物語 | 馬場直美編　岡村盛花堂 | 257 | |
| e | 1911(M44) | イソップお伽噺 | 巌谷季雄著　三立社〈初〉 | 160 | |
| f | 1927(S２) | イソップお伽 | 小坂漂著　弘文社〈10〉 | 67 | |
| g | 1927(S２) | イソップ童話集 | 菊地寛著(訳・編)　文芸春秋社 | 81 | |
| h | 1929(S４) | イソップ物語 | 新村出訳著　アルス | 93 | |
| i | 1933(S８) | イソップ物語 | 楠山正雄訳　一木淳挿絵　春陽堂 | 127 | |
| j | 1933(S８) | カナ　イソップ物語 | 吉見文雄著　一書堂書店 | 24 | |
| k | 1941(S16) | 新イソップ物語 | 山岸外史訳編　主婦之友社 | 65 | |

4表　　子どもの本に採用されたイソップ寓話

| 目次番号 | イソップ寓話集 山本光雄訳1974改版岩波 話数 358 | 資料『イソップ寓話集』 a 281 | b 160 | c 126 | d 257 | e 160 | f 67 | g 81 | h 93 | i 127 | j 24 | k 65 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 185 | 肉を運んでいる犬 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | 9 |
| 206 | 獅子と（御恩返しをした）鼠 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | 9 |
| 254 | 旅人たちと熊 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | 9 |
| 13 | 猫と鼠たち | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | 8 |
| 32 | 狐と葡萄の房 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | 8 |
| 66 | （王様を求める）蛙たち | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | 8 |
| 221 | 狼と仔羊 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | 8 |
| 243 | 田舎の鼠と都会の鼠 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | 8 |
| 318 | 悪戯をする羊飼 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | 8 |
| 40 | 狐と牡山羊 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | | ○ | 7 |
| 41 | 尻尾を切られた狐 | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | ○ | | ○ | 7 |
| 56 | 炭屋と洗濯屋 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | | 7 |
| 73 | 北風と太陽 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | 7 |
| 196 | （歳をとった）獅子と狐 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | | ○ | 7 |
| 223 | 狼と老婆 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | 7 |
| 251 | 蝙蝠と鼬鼠ども | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | | 7 |
| 336 | 蟬と蟻たち | ○+ | ○+ | ○+ | ○+ | ○ | ○+ | | | ○+ | | | 7 |
| 352 | 亀と兎 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | | 7 |
| 354 | 壷たち | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | 7 |
| 14 | 猫と鶏たち | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | 6 |
| 24 | 笛を吹く漁師 | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | 6 |
| 26 | 漁師と小梭魚 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | 6 |
| 67 | （隣り同士の）蛙たち | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | 6 |
| 78 | 老人と死 | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | 6 |
| 83 | 百姓と彼の息子たち | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | | | 6 |
| 141 | 馬と驢馬 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | | | 6 |
| 200 | 獅子と熊と狐 | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | 6 |
| 242 | 蟻と鳩 | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | | | 6 |
| 247 | 仔鹿と鹿 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | 6 |
| 270 | 驢馬と雄鶏と獅子 | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | | 6 |
| 287 | 金の卵を産む鶏 | ○ | ○ | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | | 6 |
| 15 | 山羊たちと山羊飼 | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | 5 |
| 37 | 狐と豹 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | 5 |
| 116 | 蝮蛇と鰻 | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | | | | 5 |
| 143 | 葦とオリーブ | | | ○キ | ○ | ○ | ○キ | ○キ | | | | | 5 |
| 159 | 胃袋と足 | | ○ | | | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | 5 |
| 165 | 烏と狐 | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | | | 5 |
| 180 | 犬と鶏と狐 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | | 5 |
| 182 | 犬と兎 | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | | | 5 |
| 188 | 蚊と獅子 | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | | | | 5 |
| 189 | 蚊と牛 | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | | | | ○ | 5 |
| 191 | 兎と蛙 | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | | ○ | | | 5 |
| 192 | 兎と狐 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | 5 |
| 209 | 獅子と驢馬と狐 | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | | | | 5 |
| 224 | 狼と鷺 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | 5 |
| 226 | 狼と犬 | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | 5 |
| 324 | 柘榴の樹と林檎の樹とオリーブの樹と木苺の樹 | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | | | ○ | 5 |
| 332 | 牡牛と野性の牡山羊たち | | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | | | ○ | 5 |
| 351 | 亀と鷲 | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | ○ | | | 5 |

キ：蟬→キリギリス　樫：オリーブ→樫

した岩波文庫本の『イソップ寓話集』山本光雄訳（1974）を使用し，a～kの各々の話材を照合して，11冊中5冊以上の本に採用されている話材を表に整理した。その結果，最も多く選ばれている話は，<肉を運んでいる犬><獅子と鼠><旅人たちと熊>の3種で，11冊中9冊に採用され，いずれも明治期以降，今日に至るまで誰もが子ども時代に教科書，絵本，物語りの本，児童劇その他で親しんできたものである。題目は，<欲深い犬><犬と影><ライオンとねずみ><ねずみの恩返し>などがよく使われている。以下に続く選択度の多い話材も，同じく，人口に膾炙した話であり，<すっぱいぶどう><田舎のねずみ><亀と兎>などのことばは，われわれの日常生活の中でしばしば比喩的に用いられている。

なお，今回資料として使用した「イソップ寓話」の児童書は，1945年までのものに限定したので，それ以後の日本人の生活観，人間（児童）観，教育観の変化が，寓話の選択にどのような影響を及ぼしているかは，今後の検討課題である。それは，同じ話材でもどのように寓意が解釈されるかで内容的に異なる問題でもある。

「イソップ寓話」が，明治期以後小学校の教科書に採用されたことはすでに述べたが，その最初は，明治20年5月に刊行された尋常小学読本巻二，第十九課の『欲ふかき犬の話』（図1）であった。以後この話は明治36年の第一期国定教科書にひきつがれ，犬がくわえている肉が魚（図2）になるなど，日本的に変化しているが昭和初期の教科書まで続いている。

その他教科書にとりあげられた話には，<兎と亀><牛と蛙>などがみられるが，その教材選択の条件については，それぞれの時代の教育観教科の指導目標に応じたものであったわけであるから，その点についての資料の考察が必要である。しかし，選択された寓話の条件を単純に考えるならば，いずれも低学年向けに使用されているので，話が短かく，ストーリーは簡潔で寓意が理解しやすいこと，そして，子どもの

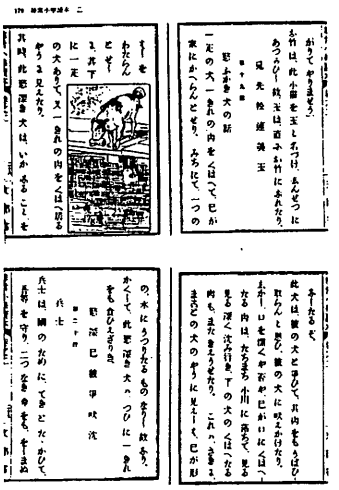


図1　明治20年尋常小学校讀本巻二
慾ふかき犬の話

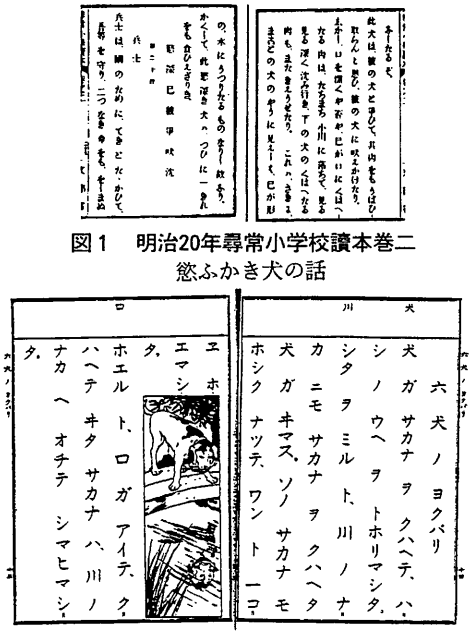


図2　大正15年尋常小学校讀本巻二
犬ノヨクバリ

生活の規範として受け入れやすい内容であること，さらに登場する動物やその行動が子どもに親しめるものであることなど，子どもに与える童話，お話の条件が備っていることがうかがわれる。表4の一般児童書にみられる選択傾向は，読者対象が低学年とは限らないこと，ページ数等に教科書よりゆとりがあること，適当な挿画が理解を助け子どもの興味を支えることなどにおいて選択の巾が広がり，話材も広がっていると考えられる。しかし，この場合も，原話の材料では理解しにくい事物に対して，<オリーブが樫の木>に，<魚のカマスが小魚>，<プラタナスがもみじ>に，<イルカがトビウオ>に<セミがキリギリス>に，という具合に身近な

ものに置きかえて再話されている。逆にいえば，日本人の生活文化や子どもの生活と縁の遠い素材が登場する話題は，子どもの本に紹介されなかったのである。例えば＜ゼウス＞や＜ヘルメス＞＜プロメテウス＞などギリシア神話の神々が登場する話や＜去勢された男＞の話などである。国際間の文化交流が盛んとなり，衛星放送や，航空路などが発達して世界の文化圏が重なり合う今日以後，この状況に多少の影響がみられるものか，諸外国の「イソップ寓話」との比較も必要である。

## 3　「イソップ寓話」の再話について

再話とは何か，という重大な問題をきちんと整理しないままで，「イソップ寓話」の再話についてみていこうとすることには無理があると考えるので，ここでは，表4において，選択度の高かった話を，シャンブリー版『イソップ寓話集』と単純に比べてみたい。なお，筆者は原話にできるだけ忠実で，原話にない付け足しや省略，置きかえを極力控えて再現するのが，再話の本来のあり方だと考えている。しかし，再話者を通して伝承される文芸は，何らかの形で，再話者の思想や感情が添えられて伝えられるものであろう。そこには再話者の個性が反映されるとともに，受け手を意図した教育観や，時代の生活感，などが投入されるので同一の話材を並列して読み比べてみることは，寓話の機能のいろいろな可能性を考えるうえでも興味深い。

『肉を運んでいる犬』について比べてみよう。

①山本光雄訳『イソップ寓話集』(1974) より

犬が肉を持って河を渡っていました。そして水の中に自分の影を見て，もっと大きな肉を持った別の犬だと思いました。だからその犬のをとるために，自分のを放り出して，跳びかかりました。そして彼は両方とも失うようなことになりました。一つはもともとなかったのですから，また他の一つは河から押し流されたものですから，彼の手に入らなかったのです。

この話は，欲張りの人によく当てはまるものです。

②上田万年解説『新訳伊蘇普物語』(1907)

犬と影

犬が肉を咥えて，小橋を渡りますと，鏡のように奇麗な水え自分の影が映ったので必然(きつと)他の犬だと思ひ，其の肉も自分のより大きそうでしたから，俯いて其を取ろうとしました。其の拍子に咥えて居た肉が口から落ちて，水の底へ沈み，取り返しのつかぬ損をしました。

訓言　影を捉えて實物を失うな

③巌谷季雄著　『イソップお伽噺』(1911)

大慾は損（犬と影）

諸君！　或一部の人は，あまり過度の慾のために，徒らに空中樓閣に等しい利益に迷って，其結果手の中の宝までも，失くしてしまふ者があります。

或時一匹の犬が，何所から見付けて来たか，さも旨さうな肉の片を咬へて，自分の家に帰ってから，ゆっくり食べやうと思ひながら，道を急いで居りましたが，途中で橋を渡らうとしますと，川の水の鏡の様に澄みきった所へ，自分の影が映りました。

けれども愚かな犬は，夫れを自分の影だとは思はないで，全く他の犬のだと思つたばかりか，其口に咬へて居る肉の片も，自分のよりは大きくて，しかも如何にも旨さうに見えますから，そっと俯いて，ウーワンと，一声高く吠えながら，その肉を取ろうとしました。

すると其拍子に，折角咬へて居た肉は，口から落ちて，ドブン！　と水の底に沈み，二度と取ることの出来ない様な大きな損をしてしまいました。

④教科書　尋常小学読本巻二(1887)

慾ふかき犬の話

一疋の犬，一きれの肉をくはへて，己が家にかへらんとせり。みちにて，一つのはしをわたらんとせしに，其下に一疋の犬ありて，

又一きれの肉をくはへ居るやうに見えたり。

其時，此慾深き犬は，いかなることをなしたるぞ。

此犬は，彼の犬と争ひて其肉をもうばひ取らんと思ひ彼の犬に吠えかけたり。

志かし，口を開くや否や，己が口にくはへたる肉は，たちまち小川に落ちて，見る見る深く沈み行き，下の犬のくはへたる肉も，またきえうせたり。これは，さきにまことの犬のやうに見えしは，己が形の水にうつりたるものなりし故なり。かくして，此慾深き犬は，つひに一きれをも食ひえざりき。

慾深己彼争吠沈

⑤教科書　尋常小学読本巻二(1926)

犬ノヨクバリ

犬ガ　サカナヲ　クハヘテ，ハシノ　ウヘヲ　トホリマシタ。シタヲ　ミルト，川ノナカニモ　サカナヲ　クハヘタ犬ガ　ヰマス。

ソノ　サカナモ　ホシクナッテ，ワント一コエ　ホエマシタ。ホエルト，口ガ　アイテ，クハエテヰタ　サカナハ，川ノナカヘオチテ　シマヒマシタ。

紙面の都合で，ここは1話材5種のみ取りあげたが，①を基準とした場合，②は文章の長さにおいて，また，表現の簡潔さにおいて大差はみられない。しかし，影が映る水が鏡のように奇麗だと説明している。絵入りでもあり，そこは読者に想像させてよいのではないだろうか。③は，小波の持論で，教訓性を前面に押し出し押しつけている。また，諸君！　と語りかける口演調は，口演童話運動を展開していた時期の作品なので，そのまま語りの脚本にもなる形にしたのではないかと思われる。④，⑤は教師の説明，指導が加えられる教材らしく簡潔である。⑤では肉は魚になっている。他の単行本にも魚の骨としたものがある。表4に記したように，<蟬と蟻>の蟬がキリギリスになっているものは少なくない。どこでどのような理由でそうなったか，伝承のルーツにかかわる課題である。

## 4　再話者の「イソップ童話」観

文禄二年の天草本，慶長から万治にかけて出版され，江戸時代には写本も少なくなかったという仮名草子本は，動物に譬えて落し話，小ばなし的に庶民の処世訓を語ったことに，その絶えざる人気の理由があったと考えられる。また欧米渡りの新しさ，珍しさも少なからずその人気に影響を与えたともいわれている。難しい教訓をそのまま並べたてる徳育の本には興味を向けない子どもも，学問教養を身につける機会をもたなかった一般庶民も，お伽噺的「伊曽保物語」は容易に理解できた。そこで近世末期には，婦女童蒙の教えのためにという考えで「イソップ寓話」が、さまざまな形で書き下ろされたといえよう。「イソップ寓話」の徳目は，その起源において奴隷に語られた話であるということから，支配者のための人生訓ではなく，被支配者の庶民の生きる術，暮しのちえを授けた話であるといえるが，万民に共通する普遍の徳目もある中で，うまく生きる方法を伝授した話も少なくない。「武士は食わねど高揚子」的な古い時代の日本的精神性ではなく，本音で生きる裸の人間のための処生訓が多く見られるようである。「イソップ寓話」を児童書に再話した，翻訳者，作家編集者達の個々の「イソップ観」の客観的な分析は，今後に残すことになったが，家庭教育に供し，児童の智徳を養成するために，読んであきない楽しい絵物語りという考えが，「イソップ物語」と題する子どもの本の大部分から，読みとれる。

## おわりに

プロジェクトのメインテーマは，大きく包容力があって，どこからでもアプローチすることができる。どこからもぐっても，登っても生活科学，生活文化の核心に近づける感じがする。しかし，迷路も多く，遠廻りしたり，行き止ま

ったり，すべり落ちたり，困難も多い。早く，大きな近道へ出なければならない。今回は大分道が見えてきた感じなので，課題の大部分は次年度以降に送ることになったが，本年度は「イソップ寓話」の再話の変遷について，資料を集めることができたので，仮説を立てた段階である。今後続けて精力的に分析考察を進めたいと思っている。一昨年一面識もない山形県の村川氏が快く，貴重な万治本の『伊曽保物語』を見せて下さって感激した。来年度も，もう少しフィールド・ワークが必要だと思うが，チーム・ワークでがんばりたい。

## 文献

### A　資料


1) イソップ寓話集　山本光雄訳　岩波文庫 1974改版〔Ésope fables, texte etabliet traduit par Émil Chambry, Paris, 1927〕のギリシャ原文を底本としている。
2) Babrius and Phaedrus (new ed. Ben Edwin Perry)—The Loeb Classical Library 1965
3) ESOPONO FABVLAS 今泉忠義編　桜楓社　天草本伊曽保物語1593　復刻ローマ字テキスト1959
4) 伊曽保物語（上）（中）（下）日本古典文學大系90假名草子集　岩波書店　1965
5) 伊曽保物語　伊藤三右衛門開板　万治２年 1656
6) 日本教科書大系　近代編　第４巻〜第９巻　国語　㈠〜㈥　講談社　1964
7) 新譯伊蘇普物語 青渓散史著 積善館＜５＞ 1892
8) 新訳伊蘇普物語　上田萬年解説　鐘美堂＜３＞1907
9) 正譯伊蘇普物語　佐藤潔訳　小川尚文堂＜４＞1907
10) ポケット新訳イソップ物語　馬場直美編　岡村盛花堂　1910
11) 伊曽保物語　旧雨桜校訂　百華書店＜初＞ 1911
12) イソップお伽噺　巌谷季雄著　三立社＜初＞1911
13) イソップお伽　小坂漂著　弘文社＜10＞ 1927
14) イソップ童話集　菊地寛（訳　編）文芸春秋社　1927
15) イソップ物語　新村出訳著　アルス1929
16) イソップ物語　楠山正雄訳　一木淳挿絵　春陽堂　1933
17) カナオトギイソップ物語　吉見文雄著　一書堂書店　1933
18) イソップ　新村出　岩波書店　1934
19) 新イソップ物語　山岸外史訳編　主婦之友社　1941
20) イソップ寓話集　山本光雄訳　岩波書店 1942


### B　引用・参考文献


1) 少年文学史　明治篇　木村小舟　童話春秋社　1949
2) 明治少年文化史話　木村小舟　童話春秋社 1948
3) 増補改訂　日本の児童文学　菅忠道　大月書店　1956
4) 落穂ひろい(上)(下)　瀬田貞二著　福音館書店　1982
5) 子どもの本の百年史　尾崎秀樹他著　明治図書　1973
6) 英米児童文学史　瀬田貞二他著　研究社 1971
7) 英米児童文学年表　翻訳年表　清水真砂子　八木田宜子編　研究社　1972
8) 桃太郎像の変容　滑川道夫　東京書籍 1981
9) 桃太郎の運命　鳥越信　ＮＨＫブックス 1983
10) 日本昔話事典　稲田浩二他編 弘文堂 1977

## 補遺； Urfabel を求めて
〔第Ⅱ報―その２―〕

馬場　喜敬

人間がことばでコミュニケイションをはじめるようになってのち，ことばで，あるお話を語ってきかせるようになったのは，どれ位の時間が経ってからであろうか。語ってきかせる前にお話を考え出すことが先行しているわけだが，それはどういう風になされたか。何が，お話を人間に考えつかせたか，など，いま，われわれが思考をめぐらすと，おそらくそれはそう簡単には解けぬ謎にみえてくる。

お話をつくるようになったことは，アルフレッド・ウェーバー（Alfred Weber）流にいえば人類が「第二の人間」の段階に至ったことを意味しているだろう。すなわち A. ウェーバーは，人類が人類としての生存をはじめた段階（その指標は，直立・手による道具の使用・ことば）を「第一の人間」とよび，人類がやがて，ある日ふと，生存の意味を考えるに至ったとき，それを「第二の人間」の生成という。お話をつくることは一種の自己反省である。自己反省という形での生存の意義付けの追求である。別のいい方をすれば，ある他者―すなわち自然・仲間・超越的存在など，いろいろ考えられるにせよ―との関係で自分のことを意識し，自分の立場・位階を理解することである。Urfabel を人類の歴史のなかに探すとき，先ずはこういった背景がうかんでくる。

Urfabel が生成した社会は，いまだ，いわゆる無文字社会であったろう。そして今日なお無文字社会は，地球上の一部にみることができる。無文字社会にどのようなお話があるか。それを知りえたなら，それは，われわれの知的興奮をかりたてる一大事件である。

以下にとり上げる話が上記のケースにぴったり適合するかどうかは，議論の余地もあろう。しかし私にはきわめて注目に値する記述とおもわれる。

シャプノの近くにトウモロコシ畑があった。種子をまく時期になると，女がトウモロコシの種子をかごにいれ，イガラペにつけておく。三日経つと，赤いウルクを体に塗り，かごをひきあげに行く。ひきあげたかごは日陰に置き，さらに三日，芽が出るのを待って，今度はみなで畑にまく。何人かが棒で地面に穴をあけ，ほかの者が種子を落としていく。トウモロコシをまいたら，シャプノじゆう誰もワニの肉を食べてはならない。さもないと穂が出ても実がはいらない。また陸ガメを食べると，大風が吹いて苗が吹き倒されるという。ヤノアマにトウモロコシのつくり方を教えたのは葉切りアリだとされている。いつだったか，フシウェがこんな話をしてくれた。

「昔，クイエ（葉切りアリ）の男がトウモロコシを植えた。そいつはププマリ（プププと鳴く鳥）の女を嫁にした。ある日，姑がトウモロコシをとりに行くというので，男は嫁に注意した。「それならおっ母さんに畑のへりのトウモロコシをとるようにいうんだ。けっして畑のなかへはいっちゃいかん。はいれば迷って出られなくなる。」

姑は孫娘を連れて畑に行った。へりには小さい奴しかなかった。そこで姑はずんずん奥へわけいっていった。急に強い風が吹いて道がわからなくなり，彼女は三度叫んだ。声を聞いて娘が駆けつけ，「おっ母あ！」と叫んだ。プププという声がかえってきた。母親はププマリに姿が変ってしまったんだ。その声はしだいに遠ざかっていく。娘はシャプノに駆けもどり，亭主を連れてきた。はるか遠くで，プププと鳴く声を聞き，亭主はいった。

「手遅れだ。もうどうにもできない。」

葉切りアリは人間にトウモロコシを教えてく

れたうえ，働き者で疲れをしらない。だからいまでもヤノアマは，トウモロコシを植えるときは，クイエリウェ（葉切りアリのヘクラ<精霊>）を呼び出して，加勢をたのむ。フシウェはすぐれたヘクラ（呪術師）だったので，クイエリウェをいつでも呼び出すことができた。

上記の一節は「ナパニュマ」（白人の女の意）という本のなかにある。

ナパニュマ，すなわちエレナ・ヴァレロという，スペインの血をひく白人の女性が，南アメリカ，アマゾンの奥地で，インディオにさらわれた。そして25年間ジャングルのなか，原住民ヤノアマ族の男の妻となり，家族をもち，且つ親族たちとのつながりのなかで生活をしてきた。そして通例は，生きて脱出することはできないとおもわれてきたこの集団から，奇跡の生還をした。そしてイタリヤ学術探険隊と出会い，その体験をつぶさに語った。こうしてこの「ナパニュマ」という本が生れた。

彼女が25年間すごしてきたネグロ川，オリノコ川上流の数100平方キロメートルの地域について，古い地図によれば，中心あたりにパリマ湖という大きな塩湖があり，その岸辺に黄金で造られたエル・トラドという都市がある，ということであった。しかし，19世紀初頭の，かのアレクサンダー・フォン・フンボルトとホングランの探険以来，この神話は消えた。そして，アラワク語系，トウカノ語系，カリブ語系等の原住民について，民族学的研究の時代がはじまっていた。というが，しかし他の地域にくらべれば立ち遅れが目立ち，調査の困難な，謎の多い地域にとどまっていた。この記録はそれだけ瞠目に値した（同書・序章）。

ナパニュマの夫，ヤノアマの男フシウェが，ある日彼女に語った話は，整理すると次の二つになろう。

① ハキリアリがヤノアマたちにトウモロコシのつくり方を教えてくれた。加えてハキリアリは疲れを知らぬ働き者で，実際にトウモロコシをつくる（発芽した種子を植える）ときにもヤノアマたちを助けてくれた。

② 昔ハキリアリ（クイエ）はププマリ（プププと鳴く鳥）の女を嫁にした。姑（すなわち嫁の義母，クイエの母）は収穫のためトウモロコシ畑に行ったが，禁令を破り，畑の奥深く入ってしまったので，鳥（ププマリ）の姿に変えられてしまった。

この二つの話は全く別のことであるようで，奇妙に結びつき，異様な無気味さをたたえている。この関連をとく前に，以上2点のあとさきをもう少し考えてみよう。

① ハキリアリは昔ながら，トウモロコシのつくり方を知っていてヤノアマに教えたことになる。アリ（ハキリアリ）がトウモロコシの栽培を知っていたなどとは客観的にいいがたいが，すでによく知られているように，ハキリアリが<農耕栽培>をすると人に印象づける習性をもっていることは事実である。かれらはユーカリ,コーヒー，プラタナスなどの樹に赴き，葉を葉柄からくいち切って巣にもちかえる。(そのさまがパラソルをさしている風にみえるので，パラソルアリとも呼ばれる)。そして巣のなかでこなごなにかみくだき，苗床とする。そこにキノコ菌をうえ，育て，キノコをえて食糧とする。こうしたことから，これを観察したヤノアマたちが，古い昔，トウモロコシの栽培をおぼえるとともに，その教え主をハキリアリに仕立てたことも想像できる。

② が，この話のなかで，教え主はアリそのものではなく，ハキリアリの男クイエである。ハキリアリに手助けをたのむといっても，ハキリアリのヘクラ<精霊>であるクイエリウェをよび出してたのむのである。しかもそれができるのは，たまたまヘクラ<呪術師>であるフシウェだからできた，というわけである。

精霊が交感しあう呪術文明の社会であることが語られている，といってよい。トウモロコシの種子をまいたら，ワニを食べるな，また陸ガメをたべてはならぬ，ということも，そこに若干，自然的根拠――自然のバランスを保つ上での経験的直感的知恵のごときもの――があるかも知れないが，呪術的段階で人心を支配する呪術的禁令の世界が根底にあることがよみとれる。

③　クイエ（ハキリアリ）とププマリ（鳥）との結婚。この異様な結びつきは，トウモロコシ収穫時に，悲劇的な破綻をきたす。それは禁令を犯した結果となっているが，これはひよっとすたら姥捨ての暗示ではあるまいか。トウモロコシの畑の奥の，声はすれど，姿はみせぬ鳥の世界は死の国の象徴のように感じられる。

ヤノアマの社会が，いわゆる無文字社会にとどまっておらず，文字をもったとしたら，或いは文字をもたないとしてもその呪術的段階を脱して，その段階の世界を展望しうるようになったとしたら，そして以上のような記録をもとにお話をつくったとしたら，どんな風になっただろうか。こうした仮定にもとづいて話をすすめるのは非学問的な冒険かも知れないが，誘惑的なことがらにはちがいない。

そのような試作の一つ，――

近隣の部族たちとの戦いにあけくれていたヤノアマたちは，狩りをしたり，樹木の果実をあつめたりするときもろくになくて，いつも飢えにあえいでいました。外で，毛虫をたべたり，戦いの合い間にバナナをたたきおとしたりできる男はまだしも，粗末につくられた家にとり残された女，子供たちは，大へんでした。何日も，男たちが食べ物を運んでこないので，空腹で力がぬけ，自力ではもう近くで食べ物をさがすことさえ，難儀なありさまでした。

ある日ハキリアリたちが，粗末につくられた家のなかを，列をなして，通りぬけていきました。はじめはびっくりした家のなかの女，子供たちは，ハキリアリがくわえていた葉をつまみあげ，かんで汁をすいました。ついでまだ葉に口でぶらさがっているアリをつかんで，指の間でひねり殺してはたべてしまいました。どうもうなアリですが，腹には蜜っぽいものもあり，胸はかりかりし，うまく殺せばよい食べ物でした。

ところが一人の女の子が母親をまねて，ハキリアリをかみ殺そうとしたとき，ハキリアリと眼が合ってしまいました。アリは訴えるような眼をしていました。そのため，女の子は口もとまで持っていったアリを放してやりました。

翌朝，少女は眼をさますと，手のなかに丸くすべすべした何かがあることに気づきました。黄色い粒で，かんでみると，じゅっと，汁がでてきて，のどをうるおしました。

それからは毎朝，同じことがつづきました。ときには粒が二つになっていることもありました。少女は，それらをみんなあつめて，誰にも見つからないような場所にかくしておきました。まもなく，その粒のあるものからは芽がでて，香りがただよっていました。少女は大地に植えてみました。芽は茎となり，みるみる大きくなって，トウモロコシの実をならしました。

さて以上，前記①のモチーフのみが語られ，②のハキリアリと鳥との結婚のモチーフはとり入れられていない。稚拙なお話のいいわけをすれば，これは，ヤノアマが実際に文字をもったとき，つくり，書き記すであろうお話の内容の豊富ならんことを予想して，そのための余地を残しておいたのである，ということにしたい。

ここにもう一つ，実際にある，トウモロコシ・モチーフの民話を引用したい。南米・インディオではなく，北アメリカ，インディアンの間

に伝えられているもの。彼此対照するとき，民話の重層性の考察に一つの光がさしこむようにおもう。

なおこれは G. コニッツキイ（Gustav. A. Konitzky : Nordamerikanische Indianermärcher）によって編まれた「新編世界むかし話集⑩アメリカ・オセアニア集」（山室静訳・現代教養文庫，1977）ににによる。

×　　×

**トウモロコシおばさん**

世界がまだ創られたばかりのころは，インディアンたちは粗末な小屋に住んで，そこらをほっつきまわっては，わずかに見つけた食べ物を食べて，やっと命をつないでいました。

ある日，ある川の岸にそった村に，ぼろぼろの着物をきて，お腹をすかしきった様子の，一人のお婆さんがあらわれました。男たちはみな狩りに出かけ，女や娘たちはたいてい川岸に行って木の根や野菜を集めていたので，村にはほんのわずかな子供と少女が残って，火種をたやさぬように守っているだけでした。その子たちはお婆さんを見ると，口々に言いました。

「ここはあんたなんかの来る所じゃないよ。隣の村へおいで。わたしたちのところにゃ，おまえさんにやるものは何もないんだから。」

ひとことも言わずにお婆さんは立ち去って，まもなく森の中に消えました。お婆さんは隣の村へ出かけたのです。しかし，どこでも同じことで，みんなはお婆さんを相手にしないで追いはらったのでした。三番目の村でも同じことで，お婆さんはただばかにされただけでした。

最後にお婆さんは，一つの村に来ましたが，それはアリゲーター（アメリカワニ）部族に属する小さい村で，小枝でかこった小屋が二，三軒あるだけでした。アリゲーター部族はインディアンの中ではたいした役割を演じていないため，勝利の記念品や高価な毛皮なんかで小屋を飾ることはなかったのです。

お婆さんがこの村でおずおずと食べ物を求め火のそばに坐らしてくださいと頼むと，女たちは言いました。「いらっしゃいよ，お婆さん，席もとってあげますし，じきに食べ物も何か見つけてあげます。あなたは長い旅をしてきて，お腹もすいているでしょうからね。」

こう言ってお婆さんに食事をさせると，それから火のそばで眠らせてくれましたが，それは一番いい場所だったのです。

朝になると，アリゲーター部族の男たちは，いつものように森へシカ狩りに出かけ，女たちは木の根や野イチゴを探しにいきました。みんなはお婆さんに，村に残って火をたやさないようにすることや，子供の世話をすることを頼みました。だれもお婆さんがだれだか知らなかったけれど，それほどに信用したのです――なにしろクリーク・インディアンのところでは，いままで何ひとつなくなったことがなかったので，お婆さんが何かぬすむなどとは考えもしなかったのです。

ところでこのお婆さんは，トウモロコシお婆さんその人が，こんなめだたない姿をして地上にやってきたのでした。

さて，夕方になって男や女たちが帰ってくると，子供たちは言いました――ぼくたちみんなもうお夕飯をすましてしまったよ。お婆さんがみんなに食べさせてくれたんだ。しかもお婆さんがくれたものは，いつも食べる根っ子や木の実よりも，ずっとおいしかったよ，と。

それをきいて，大人たちはおどろきました。そして部族の長老は，子供たちに言いました。「お婆さんに言いなさい，このつぎにはその食べ物を少し残しておくようにって。わしはそれがどんなものだか，ぜひ知りたいからね。」

すると長老は，あくる日の夕方おかゆを与えられましたが，それは今までに食べたどんなものよりもおいしかったのです。そこで長老は，お婆さんのくれる食事の秘密をさぐり出そうとしましたが，すべてむだでした。お婆さんがどこからその食べ物を持ってくるかは，ついにわからなかったのです。

ある日お婆さんは，あらわれた時と同じように，とつぜん村を去って姿を消しました。お婆さんが出てゆく姿を見た者もなく，どこへ行ったか知っている者もありませんでした。それにしても若者の一人は，そのお婆さんが煮てくれたふしぎな食べ物の味を，どうしてもわすれることができなかったのです。そこで，一人前の戦士としての成年式をすますと，きっとまだ遠くまで行ってはいないにちがいないお婆さんを探しにいく決心をしたのでした。

若者は川を渡り，山をよじ登り，森や沼地をぬけて，国じゅうを探しまわりました。しかしどこの村へ行ってきいてみても，そのお婆さんを知っている者はありませんでした。

ところである夕方，ただ一人でつかれきってたき火のそばにころがっているうちに，とろとろと眠りにおちましたが，ふと目をさますと目の前に真白な長い髪を背中までたらした，一人のお婆さんが立っていたではありませんか。これは魔物の手におちたのではないかと，若者は心配になりました。しかしその人がもつと近づいてきたのを見ると，それは長らく探しまわっていたお婆さんだったのです。

若者は大喜びであいさつして，もう一度いっしょにアリゲーター族の村に帰ってくれないかと頼みました。しかしお婆さんはそれをことわって言いました。「わたしはあんたたちのところにいるわけにはいきません。でも，あんたがわたしの教えるとおりにしたら，二度とわたしを見失うようなことはないよ。」

それからお婆さんは，若い戦士を川ぞいのある場所につれていきましたが，そこには黄色く枯れた去年の草が，丈高く生えていました。

「火をつけてその草を焼きなさい。理由はきかんでもいい，じきにわかることだからね。」

お婆さんがこう言うので，若者はいわれたとおりに火をつけました。すぐにボウボウパチパチと火は燃えあがって，天までとどくほどになり，まもなく灰だけが残りました。するとまたお婆さんが言いますた。「わたしの髪をつかんで，この焼けあとの土の上を，たて横十文字にひきずりまわすんだ。わたしをひきずり歩いた場所には，どこにも新しい草が生えてくるだろう。その葉のあいだには，わたしの髪の毛がのぞいてるわさ。そうなったら，実が熟したんだよ。おまえさんがはるばるたずねてきたわたしの食事の秘密は，それなんだよ。」

若者はさっそく仕事にかかって，お婆さんの髪をつかむと，あとを隅から隅までひきずりまわしました。その仕事がすんだと思ったら，お婆さんは消えていました。若者はのろのろと火のところに引き返すと，このふしぎな出来事について思いめぐらしました。

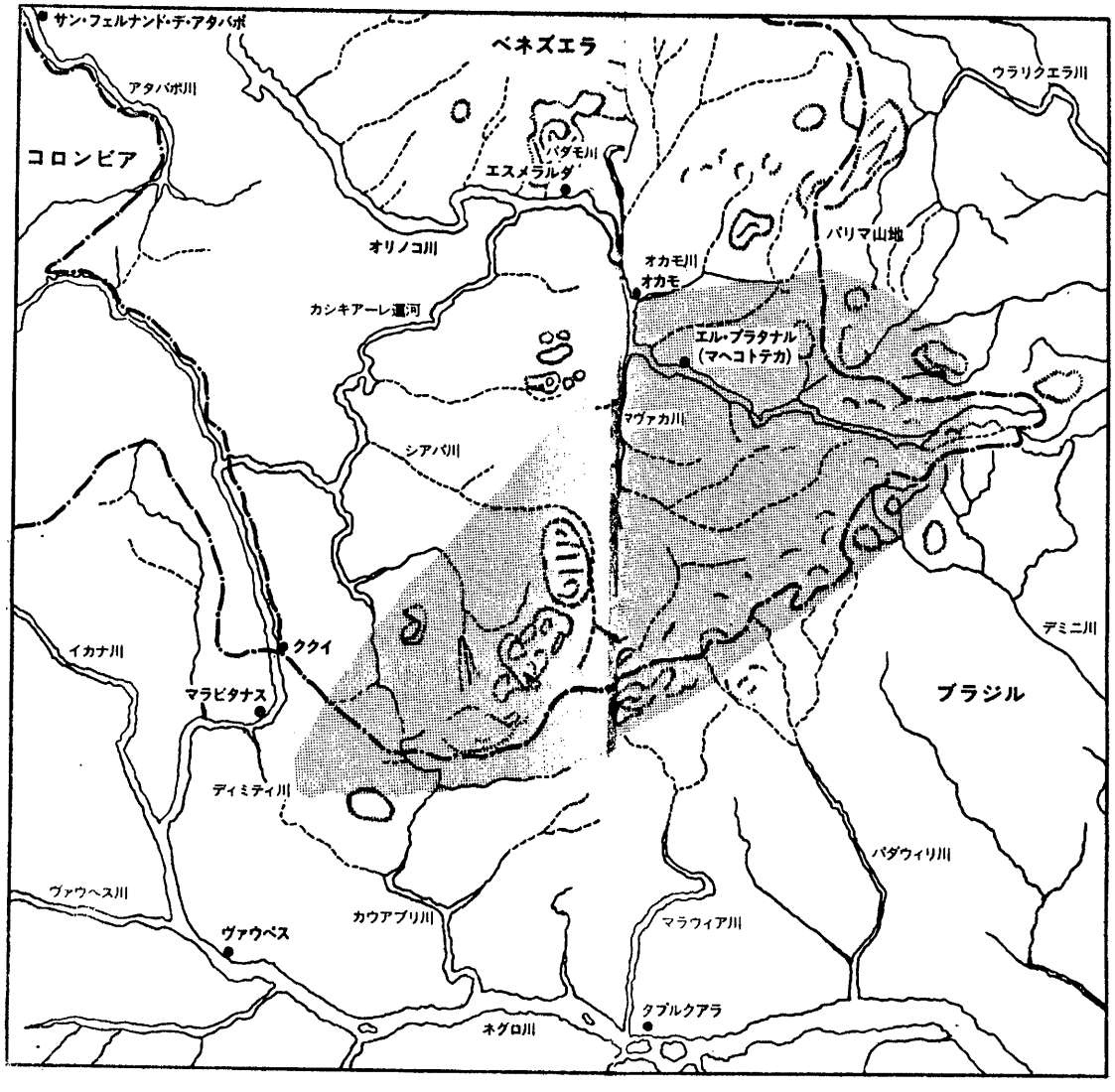
朝になって，若者がその空地に行ってみると，そこには見なれない草が，頭までとどくほど高く茂っていました。そしてその葉と葉のあいだには，そこにもここにも，あのお婆さんの髪の毛がのぞいていたのです。

そんなわけで，今日にいたるまで，トウモロコシは，毛をはやした実をつけるのです。それを見てインディアンたちは，トウモロコシおばさんが，自分たちをわすれないでいることを知るのでした。

［付記］

1986年度の本プロジェクト〔第Ⅰ報〕において，またそれにに先立つ口頭発表に際して，題目が，「日本の寓話……」になっているにもかかわらず，日本についての内容が欠如しているとの指摘をうけた。まことにもっともな指摘である。実は本題にふれようとして，そこに至るまえに，構成上のことや，発表時間の不足（裏返えせば要領の拙さ）のため，打ち切らざるをえなかったことをお詫びし，御了承を頂きたい。〔第Ⅱ報・その㈠〕はまさしく本題の一部をなしている。なお，〔第Ⅲ報〕は，当然「日本の寓話」以下が中心になる。

付図 1


サン・フェルナンド・デ・アタバポ
ベネズエラ
アタバポ川
コロンビア
ウラリクエラ川
パダモ川
エスメラルダ
オリノコ川
パリマ山地
オカモ川
オカモ
カシキアーレ運河
エル・プラタナル
(マヘコトテカ)
マヴァカ川
シアバ川
ヤノアマ族の居住区域
イカナ川
ククイ
マラビタナス
デミニ川
ブラジル
ディミティ川
パダウィリ川
ヴァウヘス川
カウアブリ川
マラウィア川
ヴァウベス
クブルクアラ
ネグロ川